

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

個人の本質はその内面にあると見なす私たちの心への(あるいは内面への)信仰は、私生活を重要視し、個人の内面の矛盾からも内面を推し量ろうと試みてきた。もちろん、このような解釈様式そのものは近代以前からあったかもしれない。しかし、近代ほど内面の人格的な質が重要な意味をもち、個人の社会的位置づけや評価に大きな影響力をもって作用したことはなかっただろう。個人の内面が、社会的重要性をもってその社会的自己と結び付けられるようになる^アとき、内面のプライバシーが求められるようになったのである。

プライバシー意識が、内面を中心として形成されてきたのは、この時代の個人の自己の解釈様式に対応しているからだ。つまり、個人を知る鍵はその内面にこそある。たしかに自己の所在が内面であるとされているあいだは、プライバシーもまた、そこが拠点になるだろう。社会的自己の本質が、個人のうちにあると想定されているような社会文化圏では、プライバシーのための^aポウヘキは、私生活領域、親密な人間関係、身体、心などといった、個人それ自体の周囲をとりまくようにして形づくられる。つまり、個人の内面を中心にして、同心円状に広がるプライバシーは、人間の自己の核心は内面にあるとする文化的イメージ、そしてこのイメージにあわせて形成される社会システムに対応したものである。

個人の自己が、その内面からコントロールされてつくられるという考え方は、自分の私生活の領域や身体へのケア、感情の発露、あるいは自分の社会的・文化的イメージにふさわしくないとと思われる表現を、他人の目から隠しておきたいと思う従来のプライバシー意識と深くかかわっている。このような考え方のもとでは、個人のアイデンティティも信用度も本人自身の問題であり、鍵はすべてその内面にあるとされるからである。

これは個人の自己の統一性というイデオロギーに符合する。自己は個人の内面によって統括され、個人はそれを一元的に管理することになる。このような主体形成では、個人は自分自身の行為や表現の矛盾、あるいは過去と現在との矛盾に対し、罪悪感を抱かされることになる。というのも自分自身のイメージやアイデンティティを守ることは、ひたすら個人自らの責任であり、個人が意識的におこなっていることだからだ。このとき個人の私生活での行動と公にしている自己表現との食い違いや矛盾は、他人に見せてはならないものとなり、もしそれが暴露されれば個人のイメージは傷つき、そのアイデンティティや社会的信用もダメージを受ける。

ただしこの¹ような自己のコントロールは、他人との駆け引きや戦略というよりは、道徳的な性格のものであり、個人が自らの社会向けの自己を²イジするためのものである。だからこのことに関する個人の隠蔽や食い違いには他人も寛容であり、それを許容して見て見ぬふりをしたり、あるいはしばしば協力的にさえなる。アーヴィング・ゴフマンはこうした近代人の慣習を、いわゆる個人の体面やメンツへの儀礼的な配慮として分析し、その一部をウェステインなどのプライバシー論が、個人のプライバシーへの配慮や思いやりとしてとらえた。

だが人びとは、他人のプライバシーに配慮を示す一方で、その人に悪意がはたらくときには、その行為の矛盾や非一貫性を欺瞞³ととらえてコウゲキすることもできる。たとえばそれが商業的に利用されると、私生活スキャンダルの報道も生まれてくるのだ。

しかし、もし個人の内面の役割が縮小し始めるならば、プライバシーのあり方も変わってくるだろう。情報化が進むと、個人を知るのに、必ずしもその人の内面を見る必要はない、という考えも生まれてくる。たとえば、個人にまつわる履歴のデータさえわかれば十分だろう。その方が手軽で手っ取り早くその個人の知りたい側面を知ることができるとなれば、個人情報を通じてその人を知るといふやり方が相対的にも多く用いられるようになる。場合によっては知られる側も、その方がありがたいと思いかもしれない。自分自身を評価するのに、他人の主観が入り交じった内面への評価などよりも個人情報による評価の方が、より客観的で公平だという見方もありうるのだ。だとすれば、たとえ自己の情報を提供し、管理を受け入れなければならないとしても、そのメリットはある。

「人に話せない心の秘密も、身体に秘められた経験も、いまでは情報に吸収され、情報として定義されるとウィリアム・ボガードはいう。私たちの私生活の行動パターンだけではなく、趣味や好み、適性までもが情報化され、分析されていく。「魅惑的な秘密の空間としてのプライバシーは、かつてはあつたとしても、もはや存在しない」^エ。ボガードのこの印象的な言葉は、現に起こっているプライバシーの拠点の移行に対応している。個人の身体の周りやヒフの内側とその私生活のなかにあつたプライバシーは、いまでは個人情報へと変換され、個人を分析するデータとなり、情報システムのなかで用いられる。ボガードはいう。「観察装置が、秘密のもつ魅惑を観察社会のなかではぎとつてしまった」。そして「スクリーンは、人びとを「見張る」のでも、プライバシーに「侵入する」のでもなく、しだいにスクリーンそのものがプライバシーになりつつある」と。

スクリーンとは、ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』に登場するあのスクリーン、すなわち人びとのありとあらゆる生活を監視するテレスクリーンのことである。この小説では、人びとは絶えずテレスクリーンによって監視されていることが、プライバシーの問題になつていた。しかし今日の情報化社会では、プライバシーは監視される人びとの側にあるのではなく、むしろ監視スクリーンの方にある。つまり個人の内面や心の秘密をとりまく私生活よりも、それを管理する情報システムこそがプライバシーホゴの対象となりつつある^エ。

「今日のプライバシーは、管理と同様、ネットワークのなかにある」とボガードはいう。だからプライバシーの終焉^{しゆうえん}は妄想である。だが、それでもある種のプライバシーは終わった。ここに見られるのは、プライバシーと呼ばれるものの中身や性格の大きな転換である。「今日、プライバシーと関係があるのは、「人格」や「個人」や「自己」、あるいは閉じた空間とか、一人にしてもらうこととかではなく、情報化された人格や、ヴァーチャルな領域」なのである。そして、情報化された人格とは、ここでいう^オデータ・ダブルのことである。

(阪本俊生『ポスト・プライバシー』)

〔注〕 ○アーヴィング・ゴフマン——Irving Goffman(一九二二—一九八二) アメリカで活躍したカナダ人の社会学者。

○ウエステイン——Alan F. Westin(一九二九—) アメリカの公法・政治学者。

○ウィリアム・ボガード——William Bogard(一九五〇—) アメリカの社会学者。

○ジョージ・オーウエルの小説『一九八四年』——イギリスの小説家 George Orwell(一九〇三—一九五〇)が著した
Nineteen Eighty-Four(一九四九年発表)。

設問

(一) 「内面のプライバシー」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「このような自己のコントロール」(傍線部イ)とあるが、なぜそのようなコントロールが求められるようになるのか、説明せよ。

(三) 「情報化が進むと、個人を知るのに、必ずしもその人の内面を見る必要はない、という考えも生まれてくる」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(四) 「ポガードのこの印象的な言葉は、現に起こっているプライバシーの拠点の移行に対応している」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

(五) 傍線部オの「データ・ダブル」という語は筆者の考察におけるキーワードのひとつであり、筆者は他の箇所でも、その意味について、個人の外部に「データが生み出す分身(ダブル)」と説明している。そのことをふまえて、筆者は今日の社会における個人のあり方をどのように考えているのか、一〇〇字以上一二〇字以内で述べよ。

(六) 傍線部 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ポウヘキ b イジ c コウゲキ d ヒフ e ホゴ

第二 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

白河院の御時、天下殺生禁断せられければ、国土に魚鳥のたぐひ絶えにけり。そのころ、貧しかりける僧の、年老いたる母を持ちたるありけり。その母、魚なければ物を食はざりけり。たまたま求め得たる食ひ物も食はずして、やや日数ふるままに、老いの力いよいよ弱りて、今は頼むかたなく見えけり。

僧、悲しみの心深くして、尋ね求むれども得がたし。思ひあまりて、つやつや魚捕る術も知らねども、みづから川の辺にのぞみて、衣に玉嚮して、魚をうかがひて、はえといふ小さき魚を一つ、二つ捕りて持ちたりけり。禁制重きころなりければ、官人見あひて、からめ捕りて、院の御所へゐて参りぬ。

まづ子細を問はる。「殺生禁制、世に隠れなし。いかでかそのよしを知らざらん。いはんや、法師のかたちとして、その衣を着ながらこの犯しをなすこと、ひとかたならぬ科、逃るところなし」と仰せ含めらるるに、僧、涙を流して申すやう、「天下にこの制重きこと、皆うけたまはるところなり。たとひ制なくとも、法師の身にてこの振る舞ひ、さらにあるべきにあらず。ただし、我、年老いたる母を持てり。ただ我一人のほか、頼める者なし。齡たけ身衰へて、朝夕の食ひ物たやすからず。我また家貧しく財持たねば、心のごとくに養ふに力堪へず。中にも、魚なければ物を食はず。このころ、天下の制によりて、魚鳥のたぐひ、いよいよ得がたきによりて、身の力すでに弱りたり。これを助けんために、心のおきどころなくて、魚捕る術も知らざれども、思ひのあまりに川の端にのぞめり。罪をおこなはれんこと、案のうちにはべり。ただし、この捕るところの魚、今は放つとも生きがたし。身のいとまを聴りがたくは、この魚を母のもとへ遣はして、今一度あざやかなる味を進めて、心やすくうけたまはりおきて、いかにもまかりならん」と申す。これを聞く人々、涙を流さずといふことなし。

院聞こしめして、孝養^{けうやう}の志あさからぬをあはれみ感ぜさせたまひて、さまざまの物どもを馬車に積みて賜はせて、許されにけり。まじきことあらば、かさねて申すべきよしをぞ仰せられける。

〔古今著聞集〕

〔注〕 ○白河院——白河上皇(一〇五三—一一二九)。讓位後、堀河・鳥羽天皇の二代にわたり院政を行う。

○殺生禁断——仏教の五戒の一つである不殺生戒を徹底するため、法令で漁や狩りを禁止すること。

○はえ——コイ科の淡水魚。

設問

- (一) 傍線部ウ・エ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「頼むかたなく見えけり」(傍線部ア)とあるが、どういふことが説明せよ。
- (三) 「ひとかたならぬ科」(傍線部イ)とは、どういふことが説明せよ。

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

一巨商姓段者、蓄一鸚鵡甚慧。能誦李白宮詞。每客至則呼茶、問客人安否寒暄。主人惜之、加意籠養。一旦段生以事繫獄。半年方釈到家、就籠与語曰、「鸚哥、我自獄中半年不能出。日夕惟只憶汝。家人餒飲、無失時否。」鸚哥語曰、「汝在禁數月不堪、不異鸚哥籠閉。歲久。其商大感泣、乃特具車馬携至秦隴、揭籠泣放。其鸚哥整羽徘徊、似不忍去。後聞止巢於官道隴樹之末、凡吳商驅車入秦者、鳴於巢外曰、「客還見我段二郎安否。若見時、為我道鸚哥甚憶二郎。」

(『玉壺清話』による)

〔注〕

- 宮詞——宮女の愁いをうたう詩。 ○安否寒暄——日常の様子や天候の寒暖。 ○參——まゐ。 餌。
○段生——生は男性の姓につける呼称。 ○鸚哥——鸚鵡。 ○餒——あ。 餌をやること。 ○禁——監獄。
○秦隴——秦も隴も中国西部の地名。現在の陝西省および甘肅省周辺。 ○隴樹——丘の上の木。この隴は丘の意。
○吳——中国東南部の地名。現在の江蘇省周辺。段という姓の商人はこの地方に住んでいた。
○段二郎——二郎は排行(兄弟および従兄弟)の中の長幼の序)にもとづいた呼称。

設問

- (一) 「主人惜之、加意籠參」(傍線部 a)とはどういうことか。わかりやすく説明せよ。
(二) 「其商大感泣」(傍線部 b)とあるが、なぜか。わかりやすく説明せよ。
(三) 「若見時」(傍線部 c)とは、誰が誰に会う時か。具体的に説明せよ。
(四) 「為我道鸚哥甚憶二郎」(傍線部 d)を、平易な現代語に訳せ。